

共助力向上をめざした防災コミュニティ構築のための研究

——文京区町会にみる交流状況と防災訓練の現状——

Improvement of Mutual Assistance Powers in Local Communities for Earthquake Disaster Mitigation
—Present State of People's Interaction and Disaster Drill to Motivate Mutual Assistance
for Disaster Mitigation in Local Communities in Bunkyo Ward—

住居学科 平田 京子

Dept. of Housing and Architecture Kyoko Hirata

抄 録 地域コミュニティにおける共助力を高めるために、地域住民の日常的な交流状況と防災面での課題を、文京区を例にとって調査した。既存の地域コミュニティである町会の活動を対象にヒアリング調査を実施し、住民の日常の交流や防災活動における現状を明らかにした。また住民ワークショップを実施し、話し合いによりどう意識が変化するかをみるとともに交流・防災面の意見を聴取した。その双方から防災コミュニティとして機能する町会の活動や防災面でも機能する地域社会の人的交流のあり方を探り、課題を整理し、方策をまとめた。日常的な交流活動において交流が促進されるような仕掛けが十分にあり、防災面の活動においても共助を活性化するために有効な仕掛けが十分にある町会は、住民の交流を土台に共助意識も高まり防災訓練への参加人数も多く活性化し、防災に強いコミュニティとなっている。自助型訓練だけでなく共助型訓練を取り入れる必要性についても言及した。

キーワード：地震防災，町内会，地域コミュニティ，交流，防災訓練

Abstract The present state of informal interactions of citizens and improvement tasks for disaster drills in local communities in Bunkyo ward are discussed in this paper. A survey was carried out of neighborhood associations as representative of local communities using the interview approach. Secondly, we conducted a workshop with local community members and other informants. Based on this workshop, we evaluated citizen's awareness changes before and after the workshop. From these two surveys, recommendations are made to upgrade disaster drills and to promote interaction between citizens in the event of a disaster. The role of interactions in neighborhood associations to function as disaster mitigation communities was considered. Neighborhood associations that already organize citizens in emergency training are seen to have established stronger ties within the community.

Keywords : disaster mitigation, neighborhood association, local community, interaction, disaster drill

1. はじめに

南関東で発生する首都直下地震の確率の高いことが指摘されており、そのための防災対策が求められている。特に震災直後は、消防・警察・自衛隊等の防災専門家の救援救助が期待できないことから、近隣住民の協力と助け合い、いわゆる共助が必要にな

る。さまざまな世代の地域住民が緊急時に共助体制をとれるかどうかは、防災訓練等が欠かせないが、同時に日頃の住民の交流にも影響を受けている。そこで、地域住民の交流状況と共助に関する防災面での課題を、文京区を例にとって明らかにする。本論文の一部は日本建築学会大会で発表した¹⁾。

2. 研究方法

共助に焦点をあてた防災コミュニティの構築について考察するには、地域住民の非常時に向けた準備状況と日頃の交流の2面から調査する必要がある。過去の事例では町会がそのための大きな役割を果たしてきた。そこで本論文では既存の地域コミュニティである町会を取り上げ、町会ヒアリング調査と住民ワークショップ調査の両面から、防災コミュニティとして機能する町会のあり方や防災面でも機能する地域社会の人的交流のあり方を探り考察する。

3. 交流状況と防災面に関する町会ヒアリング調査

コミュニティの訳語としてはかつて共同体が使われてきたが、現在は地域社会という意味で使われる²⁾。ある地域で組織されるのが地域コミュニティであるが、インターネット上のバーチャルな性質をもつコミュニティも存在する。防災に関連する地域コミュニティとしては、消防団や自主防災組織等さまざまなものがあるが、ここでは地域コミュニティの中でも古くから存在する町会の活動を取り上げる。

発災時に共助に関わる活動を円滑に行うためには、災害が発生した非常時を想定した防災訓練で準備を重ねることが重要であるが、それだけでよいというわけではない。日頃の交流や町会等の日常的な活動といった要素も防災コミュニティの活性化に寄与している。そこで非常時に対する訓練および日頃の交流と組織の問題点等を調査する目的で、ヒアリング調査を行う。

文京区では町会という言葉が使われる。その活動を所管する文京区区民課の職員2名に対して、文京区内の町会の現状や傾向をヒアリングする。その調査を参考にして防災活動が活発な町会とそうでない町会との比較を行うため、「防災活動が活発・不活発」という2つの要素をあげた。また、交流や防災活動のあり方は地域環境の影響を受けるため、さまざまな地域環境の中からマンション・一戸建て・商店等3つの地域構成要素を考慮した。これら2要素が異なるA～Eの5町会をヒアリング対象として選出した。町会の選出条件については表1にまとめた。ヒアリング調査対象者は、文京区内のA～E町会の町会長や町会役員7名とし、2009年7月～12月に実施した。

表1 調査対象の選出要素

防災活動の活発度	a. 防災活動が活発な町会 (C・E町会) b. 防災活動に参加や協力が十分に得られない町会 (A・B・D町会)
地区構成	c. 主にマンションで地区が構成されている町会 (C・D・E町会) d. 主に一戸建てで地区が構成されている町会 (A・B町会) e. 商店が多い町会 (C町会)

3.1 住民の日常の交流や防災活動における現状

各町会では抱える課題が異なるが、防災と交流を視点とすると表2のようにまとめられる。

これらの表にあがった意見を総合すると、以下の5点が文京区の町会に共通する課題であることがわかった。

- (1) 高齢化
- (2) マンションの住民が参加しない
- (3) 町会そのものが任意団体であることが運用を難しくしている
- (4) 共助意識が育っていない
- (5) 町会において防災活動がうまく機能していない

(1)～(4)までの4点の課題については、高齢者中心の町会とさまざまな地域住民(若い世代やマンション住人等)の交流を活性化させ、町会活動の円滑化を図ることが必要になる。また(5)の防災面の課題を解決し共助力を高めるには、防災コミュニティとして十分に機能できる町会に改善することが求められる。そのためには、今までの防災活動に何らかの要素を付加することが必要である。

3.2 交流面の課題と解決につながる方策

(1) 高齢化の課題解決方法については、各町会のヒアリング結果から具体的に行われている対応策を整理することで、以下の①～③にまとめられる。

①行事では楽しい要素をきっかけに交流を深める

楽しいという要素が若い世代の参加のきっかけとして重要なことがわかった。しかしB町会によれば、楽しい行事に集ってはくるが必ずしも交流や協力を行う姿は見られないということであった。楽しいだけでは人間関係が繋がっていかないケースが多いことが推察される。

E町会の例ではこうした問題解決に向けて、若い世代に祭りの運営側としての協力をしてもらおう工夫をしており、担当者が同じ若い世代の友達を連れてくることで、祭りの準備を積極的に手伝うという循環を作り出している。楽しいという要素をきっかけにするだけでなく、若い世代の町会への定着に効果

共助力向上をめざした防災コミュニティ構築のための研究

表2 防災と交流を視点とした各町会の特徴

	A町会	B町会	C町会	D町会	E町会
防災におけるよい点・工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・地震防災として「震災対策」があげられる。小学校が避難所になるので、備蓄や炊き出しを行う。 ・避難所マニュアルと町会マニュアルを作っている。 ・地区班を作り、班長がなるべく把握できるようにしている。 ・若い人も防災に関心が高い人は消防団に入る等行動起きている。 ・避難所体験キャンプは人気がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所訓練は年に1-2回行っている。 ・3年ご回、避難所マニュアルを作っている。 ・少年消防団があり、30人程加入している。割増に2歳が入る子どもが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・裾野地区の七つの町(裾野七ヶ町)で年1回合同防災訓練を実施。参加者は大変良い全体の70%。防災訓練で世代間交流も図られている(防災訓練チームがあると言っている)。 ・各マンションでも自主的に防災訓練を行ったり、防災館に社会科見学に行ったりと意欲的。 ・リーダーシップは、役員の中消防関係者に就いている人が多いため。 ・町会内に防災団を組織している。部の役割分担がはっきりしているので、町会役員はいつでも活動イメージが伝わりやすい。 ・以前火災が発生した時に荷物の持ち出しと地域の住民が協力して行うことができたので、いざという時の体制が整っているし共助意識が育っていると言っている。 ・消防団や町会役員主催の「放火訓練東ジョウ掘み」は、子どもたちに人気がある。体験型の実践的な訓練が入る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅地住民20人以下を対象の三〇〇まんる訓練は、実践的内容を行い、町会役員以外も参加するので効果的である。 ・リーダーシップは、町会長・消防部長(50代位の職階の人。消防署の訓練を受けていてなれない)・防災リーダー(消防署を訓練を受けた人)が参加する。 ・三〇〇訓練は子どもを対象していない訓練にも関わらず、親子の参加が多い。そのため参加してくれた子どもたちにお祭りや消防グッズを配ったりと工夫している。 ・実践的な訓練や楽しい訓練(防災観望会)が人気である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目白台運動公園で行っている防災訓練はマンション住人の参加が多い。マンションでは年1回防災訓練を行うことが慣習で行われているが、この目白台運動公園は実際に避難場所になるため目白台運動公園の防災訓練と兼ねている。そのため、マンション住人は訓練参加者がそれぞれのマンションで集合してから公園に移動する。 ・マンション棟ごとに防災防災・理事長・副理事長・幹事・会計の担当が分かれている。それらさらに町会担当係にはお土産に防災訓練に参加者があつて毎週マンション棟ごとに4-5人は訓練に参加する。 ・マンションで年1回防災訓練を行うことが慣習づかられているため、マンション住人はどうせ参加する町会の人とつって行っている訓練に参加したがる。 ・防災訓練は高齢者や親子の参加者が多い。運営側の人の手伝いも炊き出しの手伝いもしている。 ・防災訓練を行うことが決まったらマンションのデパートと管理人に連絡をする。そうするとマンション住人に防災訓練を行うことが伝達できる。 ・炊き出しを要しない工夫(調味料にこだわる等をしたり共助訓練としてケトルを使いしたり防災訓練参加者にはお土産に防災グッズを渡したりと、様々な工夫をしている)。 ・4町会合同避難所運営訓練を行っている。担当の文京区職員も参加する。各町会の役員同士の連携がとれている。
防災における課題	<ul style="list-style-type: none"> ・町会役員は防災訓練に積極的に参加するが、一般の参加者は少ない。 ・若い人は二極化して、関心の低い人は機会を作っても視覚味が湧かないので全く行動を促さない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所訓練は、町会役員でさえ放任せざるを得ない。 ・防災訓練の意識が低い。関心のある人や町会役員しか参加しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難場所は各小学校と決められているが、小学校は一時避難場所にはなっていない(避難所ではない)。そのため「東天を避難所」という聞きかたがあるが、なかなか通らない。 ・防災に興味の無い人に参加させるのは難しい。 ・訓練は交流の場でもあるので、人との触れ合いが苦手な人は参加しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練に参加しない理由として考えられるのは、目的意識を持って参加しようという意欲がないから、住民の交流の場にならないから。(白) ・避難所へ行く訓練を行っているが、決められた役員やマンション管理者のみしか参加しない。 ・区で要請しない、防災訓練に人が集まらない。 ・災害弱者を助けるための準備が難しくなっている。老老介護している家は一人のみ弱者として扱ってもう一人を弱者として扱わない配慮されている問題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者が多い地域だが、マンションの若い住人と交流がある。 ・お祭り300人・防災訓練100人・ラジオ体操150人・新年会130人集まる。
日常の交流におけるよい点・工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・お祭りが人気で、お神輿を担ぎたがる若者が多い。 ・防犯活動の一環である「スクールガード」は、町会の高齢者が児童館や育成館に通った子どもたちの送り迎えや、子どものお祭りに参加できる人は参加するため、町会と地域の親子が交流できる。 ・青年部があり、30-50代が加入している。活性化している。若くは千代町に住んでいる人が多いので、昔から若い人の集まりは多い。 ・日常のコミュニケーション(声かけ)を最も重視している。役員の方から積極的声かけをしている。 ・冠婚葬祭に対し積極的で、町会の方から家庭二声をかけていたり、お祭りに関しても一軒一軒お神輿の担ぎ方を案内したりと、その家の生活に介入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お祭りやラジオ体操は後でご褒美や雑煮屋があるので小学生の参加者が多い。80人程集まる。 ・人気のある「グリーンデイ」という清掃活動は、清掃目的+コミュニケーション目的で行っている。 ・下町祭りやふれあい館祭り。町会役員が主に出席している。趣味の集まりの参加者や東洋大学生の出席もある。東洋大では企画に力を入れている。 ・町会同士の伝達はうまくいっている。回覧板を返すより先にプリント配布する。レクリエーションでも交流。 ・お神輿の担ぎ方を案内したりと、その家の生活に介入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人気のある「グリーンデイ」という清掃活動は、清掃目的+コミュニケーション目的で行っている。 ・下町祭りやふれあい館祭り。町会役員が主に出席している。趣味の集まりの参加者や東洋大学生の出席もある。東洋大では企画に力を入れている。 ・町会同士の伝達はうまくいっている。回覧板を返すより先にプリント配布する。レクリエーションでも交流。 ・お神輿の担ぎ方を案内したりと、その家の生活に介入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会同士の交流は回覧板のほか、プリントを回している。 ・夏に白山山頂商店街でチャリティーの抽籤式大会を行う。町会全体の交流の場は、お祭りもちろず大会・レクリエーション等。 ・ラジオ体操は子どもや親子の参加が多い。白山山頂の山頂までお祭りもちろず大会がある。子どもたちが山車やお神輿まわりや準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者が多い地域だが、マンションの若い住人と交流がある。 ・お祭り300人・防災訓練100人・ラジオ体操150人・新年会130人集まる。
日常の交流における課題	<ul style="list-style-type: none"> ・マンションの町会加入促進が非常に困難となっている。事業所は町会に会社で加入しているが、居住者がいないため人的貢献がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢化が進んでいる。世代交代ができていない。隣近所の交流も少なく、声かけでも返事がない。 ・地域住民との交流を積極的に行っていない。家庭間の交流も少なく、声かけでも返事がない。 ・町会役員同士の交流も、会った時の立ち話や、決られた役の連絡やその後の縦横会程度しか交流がない。 ・若い人は、町会の仕事に追われ本来の仕事も犠牲にしたいという気持ちと、町会活動は無報酬であるということから町会を敬遠しがら。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会役員同士の交流も、会った時の立ち話や、決られた役の連絡やその後の縦横会程度しか交流がない。 ・若い人は、町会の仕事に追われ本来の仕事も犠牲にしたいという気持ちと、町会活動は無報酬であるということから町会を敬遠しがら。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会同士の交流は回覧板のほか、プリントを回している。 ・夏に白山山頂商店街でチャリティーの抽籤式大会を行う。町会全体の交流の場は、お祭りもちろず大会・レクリエーション等。 ・ラジオ体操は子どもや親子の参加が多い。白山山頂の山頂までお祭りもちろず大会がある。子どもたちが山車やお神輿まわりや準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会役員がマンショ理事をやっていた経験から、マンションができてからマンションに新規の住人が入ったりと、マンションが地域に溶け込むことの難しさや大町会・町会費の使い道(町会費は町会費に還元することについて町会長自らアピールする。その新規住民は納得して加入する)。
地区の特徴・加入率	<ul style="list-style-type: none"> ・マンションは多くはない。個人住宅1/2、集合住宅1/2。事業所も多い。 ・居住者の約8割が町会に加入している。核家族が多い。 ・75歳以上は約100人。町会役員は中心は60代だが、青年部があり30代~入っている。役員の子どもの多い。男2/3、女性(婦人部)1/3。 ・新しく転入してきた住民の動向はうまくいかなが、町会役員と積極的に入人は新しく加入している。 ・町会役員は商店街の商店主が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1100世帯加入していて、内850世帯は一戸建て。 ・役員は60歳代が多く、約70人。最古者は75歳以上が入っていて、68人。役員会には女性が多く、高齢化が進んでいる。 ・積極的に加入してくれる転入者は少ないが、非正規に雇用されて住んでいるという理由から加入してくる人は少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役員は60歳代が多く、約70人。最古者は75歳以上が入っていて、68人。役員会には女性が多く、高齢化が進んでいる。 ・積極的に加入してくれる転入者は少ないが、非正規に雇用されて住んでいるという理由から加入してくる人は少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マンションが多く、高齢者夫婦の二人暮らしが多い。山の手のお産院町、文化の町。 ・680世帯1300~1400人(内70歳以上が)90人。高齢化が進んでいる。15%の世帯が約200円~500円を業金。地域に住み続けている人の95%は加入している。 ・役員は会費は、50-60代が30人、70代以上が15人、40-50代が4人。女性役員は35人。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マンションが半分を占めていて1棟1棟約68世帯程度ある。最古者は100人。しかしお祭りの一暮らしは少ない。若い人も町会に加入。 ・地域に商店街や事業所はほとんど無く、典型的な住宅街であるといえる。 ・現在町会役員は11名で男性5名・女性6名である。役員が少ない人に代任が集中しがら、また動いている役員が多いの代任している。 ・19時に学校で会合を行う。
職員の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・町会に加入していない人にお祭りなどの行事でアピールをする。 ・なるべく若い町会員にレクリエーションの企画を任せると、そうすると若い人が面白そうだと参加してくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・若い人が参加しやすい行事に力を入れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役員は二世代が多い。 ・役員は二世代が多い。 ・役員は二世代が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役員は二世代が多い。 ・役員は二世代が多い。 ・役員は二世代が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しくマンションができてきた町会に新規の住人が入ると、マンションが地域に溶け込むことの難しさや大町会・町会費の使い道(町会費は町会費に還元することについて町会長自らアピールする。その新規住民は納得して加入する)。 ・子どもなどの遊び場が少なく、お祭りなど楽しい行事の告知不足。実際に参加してもらい、町会が活動している姿を見せる。 ・70歳以上に敬老のお祝い・会費のお祝い・小学校入学のお祝い金をかけている。

的に寄与している例である。

②地域特性を生かす

マンションが半分を占めている地域特性を生かし、マンション理事長をつとめていた経験からマンションに精通している役員を登用し、マンションと地域を結び付けることにより、地域全体が一体化するよう工夫している町会がみられる(E町会)。地域に住んでいる若い世代だけでなく、地域で学び働いている学生や社会人を活用する試みも行われている。

③その他の工夫

町会内の公園は、町会が自主管理し、役員が毎朝晩清掃している。児童公園は若い母親たちの交流の場になっているため町会員と母親たちが交流でき、清掃に参加する人も出てきている。公園の清掃により、交流の機会や場の確保につながり、町会員と若い世代の交流を生む仕組みを作っている(D町会)。

また硬直化している町会は、若い人の意見を聞かない傾向がある(文京区職員)という例からは、若い世代の意識を変えるだけでなく、町会側も若い世代の意見に耳を傾け、考えを知る必要があることがわかる。

つぎに(2)のマンションの住民が参加しないという課題については、表3から④～⑥の解決策が提案できる。

表3 各町会の抱えるマンションに対する問題と工夫点

問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・オートロックのマンションは居住者との接触が不可能であり、町会加入勧誘ができない。(A・B) ・マンションの契約時に地元町会に加入するよう条件を付けるが、マンション管理組合が一括すると町会費が莫大な金額になるため、支払わなくなるマンションが出てくる。(A) ・任意団体に関する付帯事項を嫌がり、管理規約から任意団体内容を排除しているマンションディベロッパーがある。町会が頼んでも勝手に排除してしまう。(A) ・管理会社の運営でゴミ置き場や清掃等大体のことが解決すると考え、町会の必要性を感じない人が多い。(A) ・賃貸型マンションの住民は短期間で移動してしまうため、その地域と交流しようと考えない。(A) ・マンション居住者が入会しないため、国勢調査や日赤募金の際に困っている。(B) ・入会も少なく会員になっても役員を引き受けない。マンション内自体交流できていない。(A) ・マンション名簿は個人の許可が取れた場合のみ作るので、ほとんど作れないも同然。いざという時に連絡が取れない。(区)
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいマンションを建てる際、建設承認と引き換えにマンション住民を100%町会に加入させる。(D) ・「三〇訓練」は、住宅地住民を対象としているので、マンション住民も参加する。(D) ・ラジオ体操はマンション住民(小学生)多い。(B) ・マンション用町会加入ポスターを作成。(D) ・「声かけ運動」により、マンション住民の一人一人もわかるように。(C) ・正会員(長く地域に住んでいる人)と準会員(分譲マンション等に住んでいて、永住しない人)に分けているのが効果的。自動的に入っているほど。(C) ・マンションの緑化スペースを活用してマンション住民と交流する工夫。(区) ・新しくマンションができたマンションに新規の住人が入ったりすると、マンションが地域に溶け込むことの難しさを大切さ・町会費の使い道(集めた町会費は全て町会員に還元すること)について町会長自らアピールする。(E) ・マンションに住んでいる町会員がまず自分のマンションに声をかける。すると同じ世代同士で声かけし合い口コミが広まり行事の参加者が増える。(E) ・マンションで義務となっている年一回の防災訓練は町会の防災訓練と兼ねて行う。(E) ・マンション棟ごとに防火防災・理事長・副理事長・幹事・会計の担当係がいる。それらはさらに町会担当係をつかって防災訓練に参加義務があるので毎回マンション棟ごとに4～5人は訓練に・防災訓練を行うことが決まったらマンションのディベロッパーと管理人に連絡をする。そうすることでマンション住人に防災訓練を行うことが伝達できる。(町会)

注:(A)～(E)はそれぞれの町会の意見を表し、(区)は文京区職員の意見を表す

④建設段階の工夫としてのマンションディベロッパーへの条件付け

建設段階から、建築主・管理会社・マンションディベロッパー等にマンション住民の加入を条件付けるという方法も有効である。

⑤町会への勧誘時の工夫

マンションに精通している町会役員がリーダーシップをとることで、マンション住民に対する町会のPRがうまくいき、加入者を増やしていることがわかる。正会員・準会員等の加入制度の工夫も成果を上げている。このように、リーダー・組織・制度による工夫が加入促進に効果的である。PRそのものも加入促進につながっている。特にE町会の例からは、地域につながる必要性を啓発し地域になじむには町会が有効であるという町会のメリットをアピールしている点が加入の決め手となっている。

⑥交流時の工夫

マンション担当を決めるなど町会独自の組織上の工夫をし、さらにそれを慣例化させることにより、連絡が密になり行事の参加や交流につながっている。

こうした日常の中で知り合うきっかけや交流の機会を地道に重ねることが大切であることがわかる。またマンションや核家族が多いという地域の特性を生かし、加入のハードルを下げる等制度を工夫することにより、町会加入につなげるようなアイデアを盛り込んでいる。

つぎに(3)「町会そのものが任意団体であることが運用を難しくしている」という課題については、個人情報の問題で名簿が作りにくくなっているが、町会ならではの小さい班単位の顔の見える活動や声かけ等地道な活動によって住民を把握しようとしている。

(4)「共助意識が育っていない」という課題については、町会役員に就く若い世代は、商店の二代目や昔からの地域住民等、共助意識が育ちやすい環境にいた人々が多い。またもともと共助意識をもっている青少年地区対策委員会の若者が町会に協力してくれるとのことであった。しかし共助意識啓発は全般的には難しく、決め手となる方策を実施している町会は見られなかった。

3.3 町会行事や活動に関する交流促進面からの分類

ヒアリングに基づく各町会の行事や活動は2段階に分類される。住民にとって交流が促進される仕掛

げが少ない活動 (STEP1) と、住民の交流が促進されるよう工夫されている活動 (STEP2) である (表4)。

表4 交流促進の度合いによる町会活動分類

STEP1 交流の仕掛けが少ない	STEP2 交流が促進される
<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操(A・B・C・D・E) ・お祭り※運営面での参加はない(B) ・回覧板(A・B・C・D・E) ・お知らせの配布、掲示(A・B・C・D・E) ・交通安全運動の表彰(A・B・C・D・E) ・名簿づくり(A・B・C・D・E) ・敬老祝い、成人祝い、就学祝いの配布(A・B・C・D・E) ・町会入会のための勧誘(A・B・C・D・E) 	<ul style="list-style-type: none"> ・防犯活動スクールガード(A) ・日頃の声かけ重視(A) ・冠婚葬祭の手伝いの積極的声かけ(A) ・お祭り※お神輿の担ぎ手を一軒一軒に声かけ(A) ・お祭り※町会役員や趣味の会や地域の大学生も出店、大学生によるプログラム作成等、運営面での参加(C) ・お祭り※子どもたちが山車やお神輿でまわりお菓子を配る(D) ・お祭り※運営側に若い世代の協力を得ている(E) ・声かけ運動でマンション住人一人一人の顔までわかる(C) ・レクリエーション(C・D) ・もちつき大会(D) ・児童公園清掃(D) ・夜回り(D) ・清掃活動「クリーン・デイ」(C) ・マンション住人への働きかけ※声かけや町会活動内容のPRをしに行く、声かけにより交流を広げる(E) ・新年会(A・C・D・E) ・役員会(A・B・C・D・E)

注:()の中は、その行事を行っている町会名を表す。

ラジオ体操等は交流が主体にはならないが、防犯活動スクールガード・清掃活動・夜回り・もちつき等は、楽しみながら参加しているうちに交流が生まれ促進される仕掛けがある行事である。祭りは、参加し食べ物等を購入するだけでは交流促進にはつながらないためSTEP1にとどまるが、祭りの運営側に関わる活動については、深く交流することにつながる。そのため、これらはSTEP2まで到達している活動と言える。STEP2に分類される活動を工夫することで、住民同士がうまく交流する仕組みを構築することができる。

3.4 防災面の課題とその解決につながる方策

(5)「町会において防災活動がうまく機能していない」という課題について表2の各町会ヒアリングから導き出された解決方策は、次の①～⑦にまとめられる。

①スキルアップ・知識が身につく

スキルアップが図れ、知識が身につく実践的な訓練が人気を集めている。一人ひとりの防災のスキルが上がることは、地域の防災力向上のため必要不可欠であり、これからも訓練の中に実践的な内容が計画的に入れられていくことが大切である。

②現実性

ヒアリング調査では「大震災に対し現実味が湧かないため、参加意欲が起きない」という意見が聞か

れたが、大震災を自分に関係する現実のものとして真剣に受け止めることができれば防災訓練参加の意欲にもつながる。C町会のように組織や役割分担をしっかりとさせることで非常時にどう動くかのイメージが捉えやすくなり、現実性や防災への意欲が高まる。またA・E町会の例では、被災時に実際に避難所となる場所で防災訓練や避難所体験キャンプを行うことにより現実性をもたせている。訓練での組織のあり方やひとつひとつの活動の流れ、工夫や問題点等全てが現実味を帯びることによって、防災訓練に参加する重要性が認識され、参加意欲につながっている。

③共助訓練・共助意識啓発

C町会の例から、共助意識が育つ、あるいは協体制度が整っていることが、いざという時助け合って自分たちで地域を守ろうとする行動につながる事がわかる。E町会のように防災訓練の中に共助訓練を必ず取り入れるよう工夫している例もあるが、共助訓練を取り入れている町会は少ないということであった。今後、共助訓練をもっと取り入れ、共助意識を高めていく必要がある。

④交流の要素

防災訓練において、スキルや知識を学ぶだけでなく、住民が交流できる要素のあることが大切であることがわかる。交流を期待して防災訓練への参加者が増え、また参加者が増えれば訓練によって交流も広がる、というように、互いによい影響を及ぼしている例がある。特にE町会の例からは、マンション住民や区の職員との交流、町会同士の交流等さまざまな交流を広げていることが、防災訓練を盛況にしていることがわかる。

⑤子どもの参加

子どもの参加は町会活動にとって望ましいだけでなく、子どもが親世代の参加の窓口になるとともに、次世代の地域防災の担い手を育てることにもつながる。E町会の例では、防災訓練において子どもにも役割を任せることにより小さい時から意識を自然に育てている。またその子どもたちの姿勢が大人にも良い影響を及ぼしているとのことであった。訓練の規模を小さくして親子が参加しやすい雰囲気を作る、放水訓練兼ドジョウ掴みのような子どもに人気の出そうな訓練内容を取り入れる等、お土産やご褒美を用意するといった、子どもを参加させるための工夫がみられる。

⑥楽しい要素

町会ヒアリングで「お祭り等楽しい行事には人が集まるが、防災訓練は参加者がなかなか増えない。」「防災に触れる機会がない人は特に参加しない。」といった意見が聞かれた。防災訓練の内容がどんなに充実していても、実際に参加してもらえなければ意味がなくなってしまう。そこで、まずは参加というハードルを越えてもらうために、住民が興味をもちそうな要素や楽しそうな要素を防災訓練に付加しているのがこのC・D・E町会である(表2)。誰もが興味をもちやすい食の要素や土産、そして防災への興味とともに楽しさも感じられるような訓練内容の工夫等により、参加が促進されている。

⑦その他

マンションの防災訓練義務付けを利用して、町会主催の訓練に参加を促し、交流するという工夫もみられた。防災のリーダーシップに関しては、消防に精通している役員がリーダーシップをとる方法や、防災リーダーの他に防災の仕事分担ができるよう組織の役割を工夫する方法等、各町会が実状に合わせてさまざまな工夫をしていることがわかる。

また組織の役割分担や必要な担当の設置をしっかり行うことで、自分の仕事に対する認識が深まり、責任感やモチベーションも上がることによって成果につながっている。

住民や災害要援護者の把握も気にかけている町会が多い。個人情報保護法等で、住民、特に障がい者等災害要援護者を含めた全体的な把握ができなくなっているため、町会では、地区班等小さい単位で住民を全員把握することを心掛けている。班長や担当者が地区班の家を一軒一軒まわって区からのお知らせを伝達、町会費の集金や敬老祝い・就学祝い等を配布する等、地道な活動の中で、家族構成や住民の現状の把握を試みている。

3.5 防災訓練や防災活動における共助の活性化

各町会の防災訓練や防災活動についても、2段階に分類することができる。住民の共助意識や行動を活性化する要素が少ない活動(STEP1)と、住民の共助意識や行動が活性化するよう工夫されている活動(STEP2)である(表5)。

STEP2まで多くの活動が到達している町会は参加者も多く、防災活動が円滑に行われていることがわかる。防災訓練内容の見直しにより参加者を増や

表5 共助意識の醸成からみた防災活動の分類

STEP1 共助意識向上のための仕掛けが少ない	STEP2 共助意識の向上を促進
<ul style="list-style-type: none"> ・備蓄(A) ・避難所マニュアル作成(A・B) ・避難所訓練※年に1、2回しかなく、参加者少ない。スキルのなものばかり(B) ・防災館の社会科見学(C) ・名簿作成(A・C) 	<ul style="list-style-type: none"> ・町会内消防団の役割分担を明確にしている(C) ・実際の避難場所での防災訓練(E) ・実際の避難場所での避難所体験キャンプ(A) ・バケツリレー(E) ・工夫のある炊き出し訓練(E) ・いつでも共助体制を整える(C) ・七ヶ町合同防災訓練※世代間交流も図れている(C) ・4町会合同避難訓練※4町会のマンション住民と地域住民の参加が多い ・子どもたちが手伝い、役割を担う(E) ・放水訓練兼ドジョウ掴み(C)

注:()の中は、その行事を行っている町会名を表す。

し、さらに共助意識を高められるよう工夫する必要がある。

3.6 交流面・防災面における対策事例の分析

ここでは町会ごとの工夫内容に注目し、課題とその解決策を具体的に分析した。表4、5で示したように、住民の共助意識や行動を活性化する仕掛けが少ない活動(STEP1)と、住民の共助意識や行動が活性化するよう工夫されている活動が十分ある(STEP2)という2段階に町会活動は分類される。交流および防災面がSTEP2に至っているのはC町会とE町会で、住民の交流を土台に共助意識も高まり防災訓練への参加が多い。E町会における交流面と防災面での課題解決策を表6にまとめた。C町会は下町的要素を有するコミュニティであり、さ

表6 E町会における交流・防災面での対策

解決策	課題	解決のための方策
交流面	日頃の交流組織としての町会の良さを基盤とする	地域の特徴を一番よく知っている町会が地位交流促進のために組織を独自に工夫したため、地域活動や連絡がスムーズに行われる。例えば制度として各マンションにも町会担当者を必ず一人は設けさせ、町会行事への参加率が高いほど成果につながっている。地域との交流の窓口としていることが成果につながっている。
	地域の特性を生かす	・マンションが半分を占めている地域特性を生かし、マンション理事を軸とめていた経験から、マンションに精通している役員を登用し、マンション住人に町会の活動や必要性を効果的にアピールすることにより、マンションと地域を結び付ける工夫をはかっている。地域が一体化できる工夫をはかっている。
	高齢化	・お祭りなど、楽しい行事の運営に若い世代を関わらせることで、活動意欲や責任感をもたせ、向世代の若い人の輪を広げている。
防災面	マンションの住人が参加しない	・町会費が自らマンション住人に、マンションが地域に溶け込むことの難しさや大切さ、町会費の使い道などをアピールし納得させる。
	町会そのものが任意団体であることが運用を難しくしている	・マンション建設前に、建築主や管理会社に交渉し、マンション住人が100%町会に加入するようになっている。
	共助意識が育っていない	・昔からの地域住民とマンション住民の結びつける努力を日頃から行っているため、互いに歩み寄り協力しようとする意識も出てきて、行事や防災訓練への参加率もよい。
	交流の要素	・4町会合同避難所運営訓練を実施し、文京区職員も参加する。各町会間士の連絡がよくなったため盛況で、マンション住人も参加し交流する。
	子どもも参加	・お年寄りや親子の参加が多いため、子どもたちや孫たちが参加し、炊き出しや案内の手伝いしている。
防災訓練に要素を付加する	楽しい要素	・参加者へのお土産の防災グッズの配布や調味料にこだわった美味しい炊き出しなど、参加につながる楽しみを工夫している。
	共助訓練	・バケツリレーなどの共助訓練を取り入れている。
	現実性	・実際の避難場所である講演で実施し、マンション住人も各マンションごとに集まって避難していただくなど、被災時を想定した現実味のある訓練を行っている。
スキルアップ・知識が身につく	・バケツリレー炊き出し避難体験・控室ハウステキ体験・備品体験他、実践的内容を多く取り入れているため、人気が高い。	

ざまな工夫がみられる。さらに各町会の交流と共助活性化の促進の度合いの両軸によりどのような状況になっているかを表7に示す。

表7 交流と防災面からみた各町会の活動状況

交流	交流STEP1(交流が促進されるような仕掛けが少ない)	交流STEP2(交流が促進されるような仕掛けが十分にある)
防災STEP1 (共助が活性化するような仕掛けが少ない)	B町会	A町会・D町会
防災STEP2 (共助が活性化するような有効な仕掛けが十分にある)		C町会・E町会

交流ではSTEP2に至っているが、防災がSTEP1にとどまっているのはA町会とD町会である。交流も防災もSTEP1にとどまっているのはB町会で、日頃の交流も防災訓練も活性化していない。防災訓練のスキル面の強化が必要なのはいうまでもないが、地域コミュニティにおける日頃の交流が弱体化している今、防災訓練に共助・交流を付加することで、共助力の高い、交流の活発なコミュニティが成立すると考えられる。

4. 住民ワークショップに基づく共助意識の向上

住民に交流してもらいつつ意見を聴取するためのワークショップを実施し、地域社会の人的交流の現状や問題点を探る。ワークショップは大学祭期間中である2009年10月17・18日に大学内で行い、17歳～80歳代の男性11名・女性16名の計27名を対象とした。調査構成は、事前アンケート・非常食試食・ワークショップ・事後アンケートである。事前・事後アンケートにより交流や防災に関する意識の変化を詳しく分析した。

ワークショップでは、アイスブレイキングとして非常食試食を行った。まず大震災に対して不安なことをテーマに話し合い、それをきっかけに自助・共助についての必要性を簡単に説明した。続いて日頃から地域の人と知り合い、交流するための機会や工夫とは、防災訓練に皆が参加したいと思うようにするにはどんな工夫が必要かという2つのテーマで話し合い、地域防災の課題と方策を探った(合計45分程度)。参加者の意識を事前アンケートと事後アンケートの結果より考察する。町会員14人、町会に加入していない人13人という内訳になっている。

4.1 非常食試食による防災意識の変化

非常食試食による防災意識の変化とその内容については、「意識が高まった」が17人、「やや高まっ

た」が9人、「どちらでもない」が1人、「あまり高まらなかった」・「高まらなかった」が0人になった。

また本ワークショップに参加するきっかけを非常食の試食とした住民が複数いることから、非常食は参加者増加につながる要素の1つであることが明らかになった。食に関わるテーマは、住民にとって身近さをもち、会話のきっかけともなりやすい性質もっている。

4.2 大震災への備えに対する意識

「大震災に対して備えたいことは何か」という質問では、図1に示すように、事前ではわずかに町会員の回答に「町会に入る」と「町会の行事に参加する」がみられたが、共助の視点による備えはあまりなく、自助の備えが多い。しかしワークショップ実施後に変化がみられた。

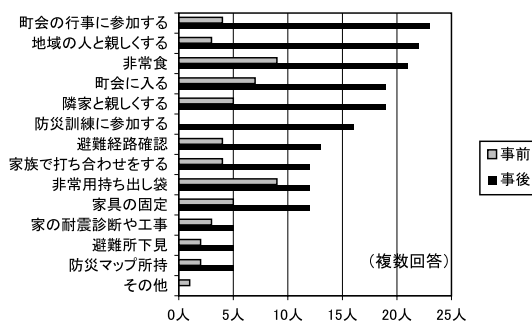


図1 大震災に対して備えたいこと

ワークショップを通じて防災・共助について学び意見交換したことが、自助だけでなく共助の重要性に気付き共助意識向上につながっている。自助は情報も多数あり、比較的備えやすいが、アンケートの自由記述欄では「被災時に助かるためには、自助はもちろんだが、地域の人と協力し合える人間関係が必要だとわかったから」、「今日の話合いで、地域の人との付き合いの重要性を感じたから」という記入から、きっかけの提供により、意識変化までは起こせることが分かる。実際の行動に結びつくかどうかは今回の調査では明らかになっていないが、現在は意識変化をなるべく多数に起こす段階であることを考えれば、ワークショップのような形で共助意識の向上に関する何らかの学びを提供することで効果が見込める可能性がある。

4.3 地域住民と交流する機会についての意識

「どんな機会に地域の人と交流したいと思うか」という質問に対し、図2のような結果が得られた。祭り等のイベントという楽しい交流の場や、立ち話というごく親しい少人数との手軽な交流に票が集まっていることから、交流の場には楽しい要素が好まれている。また、町会の会合や防災訓練と回答した人は、全員が町会会員であり、町会に入っていない人があまりどの項目にも票を投じていないことから、コミュニティに属していない人は属している人より、交流の必要性をあまり感じていないことがわかる。

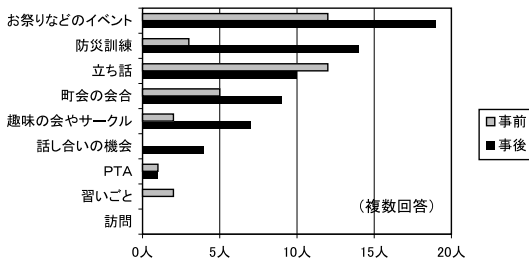


図2 地域の人と交流する機会についての意識

しかしワークショップ実施後は防災訓練や話し合いの回答が増え、特に町会に所属していない回答者が増えていることから、防災・共助の視点から交流を捉えるようになってきている。またアンケート用紙に記入された祭り等のイベントや防災訓練、町会の会合に票を投じた理由として、「地域の助け合いの必要性を痛感したから」、「何かの時に助け合えるように」、「町会は助け合う人間関係が築けていると思うから」等の意見がみられ、共助の重要性について認識されている。

4.4 地域防災の視点からの交流に関する意識

「今回のワークショップを通じ、今まで以上に地域住民と交流したいと思うようになったか」という質問に対し、「思う」が18人、「やや思う」が8人、「どちらでもない」が1人になった。「どちらでもない」と回答した1人は、町会の運営に熱心に携わる立場の回答者で、「テーマが良いのもっと時間を掘り下げて住民に活を入れないと肝心なところまでいけない場合もある。最後は地域コミュニティの希薄化している現実と直面する厳しさをもっと教えてやってほしい。」という理由を記している。

4.5 ワークショップ全体を通じての意識変化

「今回のワークショップに参加して意識が変わったことはあるか」という質問に対し、図3の結果が得られた。

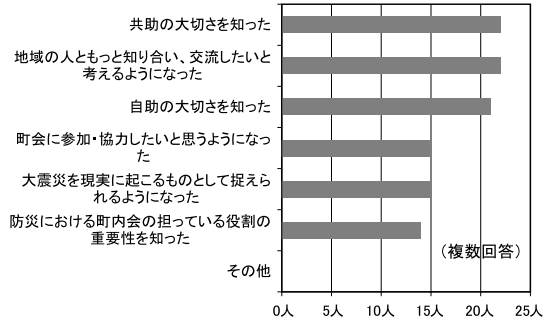


図3 ワークショップ全体を通じての意識変化

ワークショップの感想欄にも、「防災について考えるいいきっかけになった。町会や共助の大切さを知りかなり意識が変わったように思う。」、「地域の人との交流の大切さを痛感した。町会の役割が良くわかり、初めて参加したいと意識をした。」、「大震災の恐ろしさを知って、何とかしなければと思った。」、「地域の助け合いの必要性は頭では分かっていたが、今回、実際に行動することの大切さを教わった。」、「これからも町会で頑張ろうと思った。」、「ここで学んだことをもち帰って周囲に広げたい」、「地域の人とつながったり町会の仕事を引き受けたりすることに対し面倒だと思う傾向があったが、これからは楽しく頑張りたい。このような、防災を学びつつ交流や試食ができる会を今後も望む。」等の意見が記された。

また大震災に対し、このように参加者のほとんどが多く不安を抱えているにもかかわらず、自分のもっている不安に対して「何をどのように備えてよいかわからない」といった意見が多く聞かれた。特に自助の備えに比べ、共助の視点からの備えが欠けている人が多く、この傾向は町会に入っていない13名において最も顕著にみられた。理由としては、「共助に対する不安の備え方がわからない」、「地域の人に知り合いがないのでどうしようもない」、「地域の人と繋がっておくことは大切なことだとわかっているが、自助と違い、労力と時間を要するため何ははじめられない」、「スキルを身につけたいが、どこでどう身につければよいかわからない」とい

う意見がこの時点では聞かれた。

しかしその反面、「町会に行く」と町会の仕事の負担が増えてしまうのではないかと敬遠、「知り合いがいないと地域の行事にも参加しにくい」、「動機に行っていると忙しくて、地元の地域に関わる時間もないし、参加意欲がおきない」等、加入や参加にハードルを感じている意見があげられた。

逆に「協力できる部分だけ協力すればいい」と気軽に言ってもらえると入りやすい」等、仕事の負担を減らし無理なく参加できる工夫を望む声や、「町会には自分から入りにくい。役員からどんどん声をかけてほしい」という町会の積極的な勧誘やPRへの要望が出された。「子どもがいると入りやすい」、「子どもの時地域の行事に参加した経験があると地域になじみやすく町会に参加しやすい」等、学校を含めた子どもを視点においた方策、「活動は、続けることで参加者が増えていく」、「近所の人の生活がわかると親しみがわく」、「気軽に声かけ運動が効果がある」等、ちょっとした活動や縁を大切にしていること等、継続の大切さをあげる意見も聞かれた。

4.6 防災面の課題と解決につながる方策

防災面では、住民は「家族や隣人・他人を救助することができるか」、「被災経験がないので実際にどう動けばいいのか」、「短期間では助け合えるが、長期間だと皆自己中心的になるのではないか」等の大震災に対する不安をもっていた。その不安に備えるため、防災の知識やスキルを身につけ、協力して助け合う方法や被災後の生活の仕方やマナーを学び合う場として、防災訓練をあげている人が多かった。また、望ましい地域交流の場として防災訓練をあげている人が27人中14人にもものぼり、住民が防災訓練にスキル面と交流面の両方を望んでいることもわかった。

「大震災を現実起こりうるものとして実感できない」等の理由から、防災訓練に実際に参加した人は少なく、皆が参加したいと思えるような内容を備えた、より参加しやすい防災訓練への工夫を求める声が多く聞かれた。

表8に示すように、話し合いの中から出てきた具体的方策をまとめると、主に共助意識、交流の要素、子どもが参加しやすい、楽しい要素、スキルアップ・知識が身につく、現実性の6点の要素があげられる。加えてリーダー・組織・制度、PR、地域の

表8 防災訓練に皆が参加したいと思うようにするための工夫に関する意見

要素	意見
共助意識	・大震災を自分に関係のある現実のものとして真剣に受け止めることにより、「何かしようという意欲につながる。自助から共助へ気持ちのきつかけになる活動を実施することが必要。」 ・このワークショップのような、共助意識を楽しく学ぶ場があるとよい。
交流の要素の付加	・子どもからお年寄りまで参加できる内容がよい。 ・子どもが参加しやすい活動を入れて、その際も参加しやすいように工夫する。 ・防災訓練後の反省会実施し、振り返りを行うことにより、訓練参加の共通の話題で交流をはかりやすい。
子どもの参加	・大人になつてからの参加は難しい。子どものころから参加し経験を重ねる中で意識を高めることが大切ではないか。 ・子どもが参加すると、子どもに付き添って親も参加するので参加者が増える。
楽しい要素の付加	・お年寄りや無理な参加ができる内容も入れてほしい。 ・「食」や「健康」など、みんなが興味ある要素を訓練に盛り込む。 ・たとえば、焼き出し・お土産・防災グッズや非常食販売・著名人の講演・打ち上げ・お祭り・コンサート・バザー・非常食試食会など。 ・ゲーム性のある内容がいい。例えばスタンプラリーなど。
スキルアップ・知識が身につく	・災害の知識が得られる講演会をやってもいい。「どう生き延びるか」ミニセミナーなど。 ・達成感を感じられる工夫がほしい。
現実性	・被災者による体験談の講演会を行い、大震災への危機感をもたせてほしい。 ・臨場感のある災害ビデオはどうか。自動車免許更新時の震災のシミュレーション映像で危機感が伝わる。 ・災害の現実に近い訓練をする。役割分担・参加型・補助参加型と内容の工夫をし、長く続くものをよとしたい。
リーダー・組織・制度の工夫	・消防団と町会で地域情報を互いに交流して深めあうというのでは。 ・強力なリーダーがいればよい。
PRの工夫	・声を掛け合って話し合う。 ・もっと防災訓練の参加したらよいと思う。日時・場所・内容・主旨や意義なども明確に示してほしい。
地域の特性を生かす	・メールなど、より広く訓練を告知できる工夫はどうか。 ・住民同士だけでなく、地域内の事業所や学校にいる人を活用するのはどうか。 ・学校と連携し、学生の強い力を得る。
防災訓練の回数	・企業の自治体消防団の協力で、火災の延焼を免れた例もある。文京区は印刷業者が多いので、印刷業者が持っているフリーソフト提供の協力を仰げる約束しておくといいのでは。 ・防災訓練の回数を増やし、参加しやすいようにしてほしい。一回の規模を小さくすることもできる。季節ごと内容の違う訓練などもどうか。

特性を生かす、防災訓練の回数等について工夫をすることがより参加につながると考えられる。

5. 町会を基盤とした地域防災コミュニティの強化につながるための課題と方策のまとめ

地域力を向上させるためには、日頃から地域住民と知り合い、つながり、いざという時に助け合える心がまえや人間関係を構築しておくための交流面と、大震災を現実性をもって受け止め、防災の知識・スキル・協力の仕方・行動の仕方等を身につけシミュレーションしておく防災面との両面が必要である。町会ヒアリング調査と住民ワークショップの結果の双方からまとめてみる。

交流面と防災面とのどの部分を具体的に強化していくかについては図4のようにまとめられる。交流と防災面は互いに影響を及ぼし合っている。これらの要素を用いて日頃から町会を活性化させる、あるいは防災訓練を活性化させることで、両面によい影響が生まれることを明らかにした。

6. おわりに

地域住民の交流状況と防災面での課題を、文京区を例にとって明らかにした。既存の地域コミュニティである町会の活動を対象に、町会ヒアリング調査を実施し、住民の日常の交流や防災活動の現状を整理した。また住民ワークショップを実施し、さまざまな地域や年代の人々の話し合いに基づく交流・防

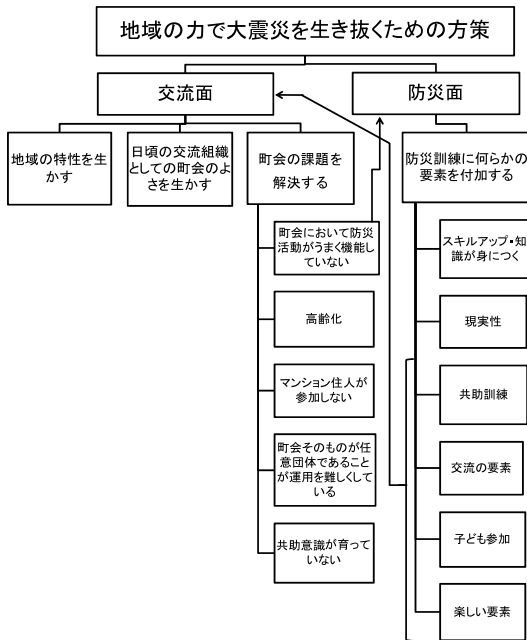


図4 地域の力で大震災を生き抜くための方策

災に関する意見とその変化を聴取した。その双方から防災コミュニティとして機能する町会の活動方法や、防災面でも機能する地域社会の人的交流のあり方を探り、課題の整理と方策の要点をまとめた。

各町会活動の特徴を整理し、交流が促進されるような仕掛けが十分にあり、防災活動において共助を

活性化するために有効な仕掛けが十分にある町会は、住民の交流を土台に共助意識も高まり、防災訓練への参加が多く活性化し、防災に強いコミュニティとなっている。また防災面においても自助型訓練だけでなく共助型訓練を十分に取り入れる必要のあったことがわかった。

地域コミュニティにおける日頃の交流が弱体化している今日、防災訓練に、共助意識を芽生えさせ日頃の交流にも役立ち、助け合う体制をとれるようなシステムを構築するための共助型訓練を取り入れ、共助・交流を付加することで、より防災に強い交流の活発なコミュニティが成立することを考察した。

本研究をまとめるに際し、卒業論文として取り組んだ小林真理子氏のご協力に感謝する。また町会ヒアリング調査においては文京区役所および町会長の皆様、ワークショップの参加者と非常食メーカーの皆様へ深謝する。

引用文献

- 1) 小林真理子, 平田京子: 防災に強いコミュニティを形成するための地域社会の人的交流のあり方と課題—市民の防災力向上に向けて—その33—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)(都市計画), 975-976 (2010)
- 2) 木下謙治: 家族・農村・コミュニティ, 恒星社厚生閣 (1991)